

身体を敷布から出して、ちょこんと腰掛け、座れるスペースを空けた。誘うように招くと、意図を汲んだように人影は近寄ってくる。

「ちよつと話したくって」

暗い部屋で、時計の針が刻を刻む音が聞こえた。

ベッドが二人分の重さに、ギシ……と、悲鳴を上げる。可哀想だけれど、構ってやる暇は無い。近くに居る彼はいまだんな顔をしている？わからない。

二人して黙っていると、胸が騒いだ。太鼓鐘は、伴侶となるだろう相手。実感はない。好きとか嫌いとかそう言う次元では無く、落ち着かない。隣にもたれかかり、密着して肌の体温を感じると、ひそかに息を吐いた。やけにうっとりとして惚けてしまう。多分今まで淋しかった。甘えを、甘ったれをさらけ出せる相手を欲していた。これが、彼、だったらいい、と思ってしまうのは失礼だろうか。

「っ……」

唇が、合わさる。啄むように、優しく。初めての行為に背筋が震える。話すなんて、うそ。くすくすと笑いたいくらい解りやすいうそ。

緊張を解す様に、冷えた手をあたたかい手に握られた。

ベッドに倒れ込めば、ああ、逃げ場もない。

ちゅ、と生々しい音をさせて離れると、無意識に止めていた呼吸をするべく唇を開いたのを皮切りに、舌が入ってきた。ぬめぬめと唾液をまとった舌だ。唇を舐められ、俺の舌がつかまって、絡むと。ぞわぞわと背を這い上がる何か。この感覚が何なのか解らないまま、己も積極的に舌を絡めた。

粘膜の接触にともなって、流れ込む霊力が、心地よいを通り越して、快楽が脳を痺れさせる。日常的に枯渇していた霊力を一滴ずつ勿体ぶって注がれているようで、もっと、くれと求めた。

はしたないとかそういうことは飛んでしまっ、もう一度とせびる。

勿体ぶって閉じた唇を舌で誘うように往復した。太鼓鐘の唇は柔らかくて、美味しそうでつつい、下唇を食むと、焦れたように口内へ舌がまた侵入して、攻防は俺が劣勢になる。しかし気持ちが良いくて、荒くなる息をはっ、はっ、と吐き出しながら、絡まった舌から伝い落ちてくる唾液をコクンと嚥下する。頭がぐらぐらして、身体が熱い。

太鼓鐘も同じ気持ちだろうか。気になって、首筋に触れた。驚くほど熱くて、何より、脈打つ頸動脈が興奮を物語っている。

「ッ……これ以上は」

がば、と身を起こそうとする彼に、同じ男ととして、察するものがある。恐らく、下腹部のそれだ。熱を持っていたのが、薄い夜着を通して、脚に当たっていたので解った。ともかく楽にしてやろうとそればかり考えて（多分この時変な具合に理性が飛んでいた）彼のそれに、布越しに触れてみる。

「えッ、？」

戸惑っている彼を置いてけぼりにしつつ、寝間着が浴衣のようであったので、触りやすくして僥倖だった。下履きは西洋の物だったので上から手をつ込む。

は、と濡れた息が顔にかかる。嫌がっていないことを確かめ、指で先端を包み、やわく揉み込む。けれども脱がせるのは上手くない。手こずっているのを察したのか、太鼓鐘は下履きを脱いでくれると、動きは大胆になる。先走りを塗り拵けて滑りやすくなった竿に、輪を作り上下に擦る。がちがちに硬くて、そのくせ鉄とは比べるべくもなく、柔らかい。

「うあ、ッ、」

かく、と彼の腰が揺れる振動が手から伝わる。おそらく、触られ慣れていないのだろう。

顕現して初めて快樂を与えているのが、俺だと思つくと、どきどきしてしまふ。知識として知っているだろうしあれこれ頭にたたき込まれただろうけれど、リアルな刺激はどうだろう？

先ほどキスしたとき、自分も感じたようなすさまじい快樂を、彼も感じているだろうか。まだ幼げな茎を可愛がりながら、限りなく興奮を刺激される。ぴくぴくと震える肉竿。絶頂が近い。

先走りをすり込むように、先端ばかり触っていた俺の手を、上から握り込むと、にちゆにちゆ、と上下に擦り始めた。

太鼓鐘の掌はまだ少年のようで所々柔らかく、その指が俺の手を道具のように使うその瞬間、頭がびりびりと痺れて、目が潤んだ。ため息が甘くて、酒に酔酩しているかのような高揚がくせになって、もうたまらなかつた。

動きが激しくなると、彼は俺の首元に顔を埋めた。少し硬質な髪が、さらりと肌を撫でる。すん、と匂いを嗅がれると、くすぐったさから音も無く笑い声を溢す。咎めるように、れる、と舌が這うせいで、いやらしい事をしているのだという自覚を嫌でもさせられる。濡れた呼吸が、耳に近いところで、聞こえている。